



男は 痛い !

國友万裕

第28回

『万引き家族』

1. 俺には権力が似合わない

「今更、専任になる気はないでしょう？ 先生だったら、非常勤をしながら、書き物でもしていた方がいいと思いますよ」

ある出版社の人と飲んでいたときだ。唐突にそう言われた。

思えば、若い頃は50代半ばになって非常勤で生活をしている自分なんて想像もしていなかった。何も保証はないけれど、どこかでポストを与えられる時が来るだろうと思っていた。しかし、こだわりの強い性格の俺は、ポストがもらえるのであればどこの大学でもいいという気にはなれず、また大学をめぐる状況は厳しくなる一方で、とりわけ、俺たちのような文学系の先生がテニユアの仕事をえるというのは急速に難しくなっていた。いまの若い子は文学なんて読まない。俺はジェンダーや映画の研究もしているが、ジェンダー論や映画論のポストなんてさらに少ない。加えて、大学の専任は様々な条件の重なり合いの元に決定して行く。入試みたいに単純に点数で決まるようなものではない。不確定な要素が極めて大きいのだ。

したがって、もう諦めるしかない、とりあえず、懸命に生きていけば、大学のテニユアにはなれないにしても、何らかの道が開けるだろうと思っていた。しかし、他の生きかたを探そうと始めた男性運動は裏目に出た。俺は、新しい生き方、他の世界の友人を求めて運動に参加したのに、日本の男性運動は学者集団。むしろ火に油を注がれるようなことにもなった。さらには、37歳の時に決定的な決裂が起き、俺1人だけグループから村八分の

ようなことになる。今思えば、あの人たちと俺は考え方が違うのだから、起きるべくして起きたこと。あのまま続けていても、どこまで行っても平行線だっただろう。そのことがわかっている、つらかった。そのグループで、俺と世代の近かったメンバーたちは、順調に就職は決まり、えらくなって行った。

大学の非常勤講師の仕事をはじめた頃から、一生非常勤講師のまま終わって行く先生もいることは知っていた。大学のお昼休み、講師控え室で奥さんの手弁当を食べている先生たちの多くはそうだった。なんとなく見ている辛いものがあった。非常勤の仕事の場合は、時間給なので、生活のためには仕事をいっぱいせざるを得ず、家庭のある人の場合は、奥さんがお金を稼げる人でなかったら辛い。皆かつては専任を目指していたはずなわけで、その夢叶わず、自分は負け組みたいな痛恨の思いを抱きながら仕事をして行くのは惨めだろう。

俺は非常勤を増やすことよりもむしろ翻訳の道を模索し始めた。けれど、翻訳もそうそう甘い世界ではなかった。大学の非常勤の場合は少なくとも1年は雇ってくれる。しかし、翻訳の場合は、エージェントが気に入らないとその時点でアウトになる。エージェントは翻訳家を育てる気などない。最初から出来上がっている人でないとやっていかれないのだ。

ちょうど40歳の時、専門学校の非常勤講師の仕事が入った。あの頃の俺はまだ自分の枠を破ることはできなくて、中学や高校の非常勤はしたくなかった。専門学校は短大と同じ扱いになる。使うテキストも大学と同じだ。専門学校で教えることは、妥協案だった。こ

こで5コマほど仕事をいただいたので、コマ数はそれまでよりも多くなり、最初は心配だった。ところが、実際それに慣れてくると意外にいける。何よりも収入が増えたので、満足に買えなかったものも次第に買えるようになって行った。生活するのにかつかつで、保険や税金もまともに払えなかった頃に比べれば、はるかに生活が良くなった。また40過ぎてから徐々に交際範囲が広がり、学者としても認めてもらえるようになって行った。親友と呼べる男性もできた。40代の後半になると単著や共著も何冊か出すことができ、自分の勉強してきたことを結実させることもできた。それまで散々苦勞をかけた母も徐々に幸せになって行った。

世の中もこの10年の間には大きく変わった。派遣労働者や契約社員が増えて、定職を持たないことが珍しいことではなくなり、独身者の割合も増え、とりわけ男は生涯未婚率が4人に1人とも言われている。中年を過ぎて、独身でいることが変に見られることもなくなった。俺は不登校のトラウマを抱え込んでいるが、不登校も今となっては一つの選択肢。様々な本も出ているし、サポート体制も整って来て、不登校が後ろ指さされる時代は終わりとなった。

振り返れば、40代は充実の10年間だった。この上昇気流が50代になっても続いてくれることを期待していたのだが、50になるとスランプが待っていた。また気力もなくなってきたのだ。40代の頃までは心の中にもやもやした整理できないものがたくさんあった。それを解明するために一生懸命勉強していた。研究がそのまま俺の人生と直結していた。ところが、自分の思いを本にもまとめたことで、

もはや、もやもやがほとんどなくなってしまったのである。

これから人生の新しい局面。確かにそうなのだ。俺は非常勤講師を続けながら、書き物でもしていた方がいいと思う。今は十分非常勤講師の仕事はあるし、生活には困らない。でも、辛い面もある。以前に比べて、非正規雇用に対する世間の理解は深まってはいるものの、俺には権力が無い。世の中、いざとなったときには権力が物をいう。そのことを親友に漏らした。

彼からは、「先生に権力は似合わないですよ」と言われた。

そうなんだ。権威主義は俺が一番嫌いなもの。親友から言われたこの台詞は最高の褒め言葉なのかもしれなかった。

2. 脱ぐ男は痛い！

この原稿を書いている時点で、杉田水脈議員の LGBT に対する問題発言で、彼女の進退が問われている。LGBT の権利に対する意識がここまで高まって来たのは驚くべきことだ。俺たちが子供の頃には有識者の人たちが当然のように LGBT をバカにしていた。しかし、時代は変わった。とりわけ、この5年間くらいの変わりようは大変なものである。おそらく、アメリカが同性婚を認めたことが大きいのだろう。日本でも日増しに LGBT の人たちがカミングアウトしていく様子が肌で感じられる。

しかし、男性のジェンダーの問題はいつになったら日の目を見るのか。一部日の目をみているが、それは女性から DV される男性やリストラなどで自殺に追いやられる男性な

どであり、男性への性的・肉体的虐待の部分への突っ込みはまだ見られないのではないか？

先日、島本理生の直木賞受賞作『ファースト・ラブ』を読んだ。少女期の性的虐待のトラウマで殺人を犯してしまう若い女性を描いている。女性作家の描くものにはこういう話は本当にたくさんある。しかし、男だって性的虐待は受けているのだ。

例えば、いまだに兵役を男子にのみ課している国はある。体力や運動神経のない男性にとっては、過酷なことである。また、この連載で何度も書いて来たが、裸を強制されることは男性差別なのである。

夏休み前のある日、教え子の男の子と大学近くのカフェで食事をした。若い学生と話ができるのは、先生という職業の一番楽しいところだ。その子は、体育会系で、明るい子で、話がしやすい。授業中にもよく発言してくれる子だった。インスタグラムの話になった。俺はマッチョ研究なので、マッチョの話になり、この頃は「体育系の子だと、自分の上半身裸の写真を自分で撮ってアップしている男の子いるよね」と話をした。すると彼は、「あれは痛いですよ」と言うのだ。彼に言わせれば、俳優さんが裸を見せるのは当たり前のことだけど、普通の男性があそこまですると無理しているというのが見えるというのである。俳優さんだったら、見せるのが商売だから仕方がない、だけど、役者でもないのに、自分の裸身を披露して、「どうだ、俺って、男だろ？」とカッコつけるのは、彼のようなカラッとしたスポーツマンの目から見ても痛々しく映るのだ。やはり、俺の確信はまた一つ深まった。彼と限らず、よほどのマッチョか、

あるいはおふざけタイプの子でなければ、自分の上半身裸の写真なんてださない。体育系のやつであっても、大概の子はむしろ抵抗を示すのだ。この連載で、こういうエピソードは何度も書いて来たけれど、これまで俺が話した男子学生（多くは体育系）で、裸になるのが平気なんて答えた学生は一人もいなかった。暑い夏の練習の後、男ばかりだからまあいいかと上裸になる学生はいるのだろう。しかし、それを強制されることが平気だという子には今の所お目にかかっていない。

なのに、前にも話した女性カウンセラーは、「脱ぐのが好きな男もいる。その時一緒に脱がされた子がいる」と返して来た。俺は4年経った今でも、この言葉が胸に突き刺さっている。「脱いだ」ではなくて、「脱がされた」である。女優さんが映画で「脱ぐ」ことはあるが、「脱がされたり」したら犯罪である。おそらく彼女は、男の人なのだから、女が裸にさせられるのとはわけが違うのだと思い込んでいたのだろう。俺みたいなことを言う男には会った経験もないから、そんなことについて考える機会すらなかったに違いなかった。

男性だったら考えられないようなことを女性に課すことは、女性差別であると糾弾される。まだまだ家事や育児をしているのは圧倒的に女性であるにしても、「男性はしなくていい・女性はすべきだ」ということを大っぴらに言うことは許されない。ところが、女性には絶対に強制されないことを男性に課すことは、それが当然のこととまかり通ってしまう。

レイプは、性欲ではなく支配欲だとしばしば言われる。あの時男子中学生全員を脱がせた男の先生は、支配欲を満たしたかったのだ。ひょっとすると性欲もあったのかもしれない。

あの先生はゲイだったのかもしれないし、ストレートの男性であっても若い男の子に性的ないたずらをするのはアメリカでは大きな社会問題になっている。今思えば、あの人のしたことは、集団レイプに等しかったのである。そうでなければ、全員を脱がせる必然性なんてない。満員電車で、誰かに触られたとき、混んでいたから偶然触れただけなのか、それとも意図的に触ったのか、それくらいは感知できるという女性が多いだろう。俺はあの時、あの男の先生に性的な意図を感じとっていたのだった。

忘れて欲しくないのは、俺がこの屈辱的な体験を全て話すのには、20年以上の月日が必要だったということだ。俺と同じ屈辱を味わい、PTSDに苦しんでいる男性は他にもいるだろうが、それを誰かに話すまでには、トラウマとの過酷な闘いが必要となる。したがって、大概の男は蓋を閉めて話さない。だから女性たちは気づかない。男だって傷ついているということ。

俺を苦しめたものは、これだけではなかった。当時、体罰、過酷な叱責など、子供の人権を無視した過酷な先生たちの支配は、枚挙にいとまがないほど起きていた。しかし、今となっては、学校の問題も様々な場所で批判されている。いまでもそういう学校はあるのだろうが、昔に比べればマシにはなっているのだろう。俺は生まれるのが早過ぎた。世の中は確実に俺が願っていた方向に流れてはいるのだ。

カウンセラーの女性には理解してもらえなかったのだが、実はこの人は、友人の友人に当たる先生の紹介でついたカウンセラーだった。この人を紹介した先生とはその後会って

いないのだが、友人の話だと、「うまく行かなかったって話は聞いているから、悪いことをしてしまったとは思っているんだ。だけど、あの時点で紹介できるところがあそこしかなかったんだ。だからマッチングまでは考えていることができなかつたんだよ」とおっしゃっていたのだそうである。今はカウンセラーもマッチングを考えるくらいに多様になってきている。昔は、マッチングを考えるほどカウンセラーもいなかったし、多様性を認めない時代だったのである。

あれから4年たった。おそらく彼女も、暫くたって、俺が言わんとしていたことを理解してくれているかもしれない。それを祈るのみだ。

3. 故郷への帰還

8月。1年ぶりに実家に里帰りした。母は入院中である。右膝の手術を終え、その後リハビリ、9月には左脚の手術が控えているのだが、土日は家に帰してもらえる。俺も、そうそう長くは帰れないし、母の帰宅に合わせて、週末の土曜日に戻った。母は思っていたよりもはるかに元気で、頭も全くボケる様子はない。右脚の手術の後、しばらく体調が悪くて、辛かったらしいのだが、いまは全く問題ない。「これだけ右脚が動くようになったんだから、左脚の手術もしなきゃね」といたって明るく話していた。

その日のお昼は弟がカレーを作ってくれた。母が入院してから、弟は自炊を始めて、今や料理が趣味のようだ。俺が美味しそうに食べると嬉しそうにしてくれる。弟は、感心するくらいに親思いで、母はつくづく幸せだなあ

と思う。

その後、3人でお墓まいり。父の方のお墓だけにしておこうかと母は言っていたのだが、弟の方が母の方にも行った方がいいと言い出し、両方の墓に弟の車で行くことになった。俺を可愛がってくれたのは、母方のおばあちゃん、お金をたくさん残してくれたのは父方のおじいちゃん、感謝しなくてはならないのだろう。しかし、俺はこの町を今でも憎んでいる。それは、俺のその後の苦しい人生の原因を作ってしまったのがこの町だったからだ。俺はこの町の墓で眠るのには、正直なところ躊躇しているのである。母の兄にあたる叔父さんは、死んだら散骨してくれと言い残しているのだそうだ。俺は京都に眠りたい気もするのだが、それでは母や弟に悪いという気持ちもある。でも、どこの墓に入っても、あの世では一緒になれるのではないか。そのことについてはまだ焦って考えることもない。これからまだ20年くらいは余生があるだろうから、その間にゆっくり考えればいいのだ。残された人生で全てのわだかまりが消えて、澄み切った気持ちで死を迎えることができたなら、それが最高の死に方だろうなあ。

ここ数年で、遠縁のおじさん、おばさんたちは、たくさん亡くなった。皆80から90くらいの年齢だから決して早死にではない。父方のおじさんやおばさんのことは母から聞いてある程度知っているが、父方の従兄弟姉妹たちが今何をしているのか、従兄弟姉妹たちの子供たちが何をしているのかは、母も詳しくは知らないみたいだった。従兄弟姉妹なんてそんなもの、兄弟だって他人の始まりだというし、まして従兄弟姉妹なんて、親しい従兄弟姉妹でもない限りは疎遠になって行くの

だ。

俺は離れて暮らしているの、もうおじさんやおばさん、従兄弟姉妹たちと一生会う事すらないのかもしれない。それはそれでいいと思う。檀一雄原作の『火宅の人』という映画で、緒形拳と松坂慶子が別れる場面。「駅で別れるなんて嫌だ」と彼女がいう場面が今でも忘れられない。人は知らないうちに別れるのが一番いい。大げさな場所だと余計に悲しくなるのである。もう学生時代の同級生とも一生会うことはないだろう。それでいいんだと思う。

しかし、母や弟とは死ぬまで同体である。これまで俺がここまで生きてこれたのは母と弟のおかげで、母と弟には幸せになってもらわなくてはならない。

母や弟を不幸にしたくない、心労をかけたくない。それが俺の祈りになってきた。これは俺にとっての大きな成長である。若い頃は家族のことなんて考えているゆとりはなかった。感謝はしていても、一番言いたい放題言えるのも母だったから、つい甘えていた。しかし、今は母のことを心配している。もう母は80歳だ。余生を幸せに生きて欲しい。

母は死ぬことは怖がっていないようだ。「死んでから先のことを考えるんじゃなくて、生きている間をちゃんと生きていけばいいのよ」と母は言った。

翌日は、お昼から豆腐のフルコース。これは俺のおごりだった。小さな和室の掘り炬燵で、3人でフルコースを品よく食べるのは格別なものがあった。母や弟にひとときの幸せを感じてもらえるのが嬉しかった。

これからは年に3、4回は里帰りしようと思った。俺ももう50代半ばだ。自分のしたい

ことばかり追い求める年齢は終わって来たように感じるのだ。この頃、何をするにも昔ほどのワクワク感がない。昔は映画を見るために大阪や神戸までしょっちゅう行っていた。しかし、いまは京都市内の映画館でも億劫で行く気にならないことが度々である。スポーツクラブも、無理してまでいかない、余裕があるときだけと割り切るようになった。これでいいのかもしれない。自分の体力や気力を考えて、自分のできる範囲のことをしていく。これからはそういう年代に入りつつあるのかもしれないのだ。

とは言うものの、まだ50代半ば、先は長い。なんらかの希望や楽しみは持たなくては、余生がつまらないだろう。さあ、これから何を始めようか。

4. メタボからの脱却

1年ぶりにミニドッグを受けた。なんと体重が1年前よりも12キロ減り、93センチあった腹囲が84センチになっていた。先生に尋ねると85センチ以下はメタボではないとのことで、ついにメタボ脱却である。看護師さんも、去年の記録と比べて、「頑張られましたね」と微笑んでくれた。

とは言うものの、俺は相当普段薬を飲んでいる。心療内科の薬の他に、中性脂肪を落とす薬やコレステロールを落とす薬などを処方してもらって、毎日飲んでいる。最近では便秘にも悩まされるようになり、便秘薬も加わった。正常眼圧緑内障なので、目薬も毎日ささなくてはならない。

これらの薬は治るまでではなく、永久的に服用していかななくてはならないのだ。50代の

半ばになれば、これくらい薬漬けになるのは仕方がないのかもしれない。今は 100 円ショップに薬を 1 回分ずつ分けていれる容器が売っていて、母はこれを使って、1 日 3 回の薬を忘れないように分けている。俺も刻々と身体は老化しているのである。

しかし、マッサージの人からは、「昔に比べるとだいぶカッコいいカラダになりましたよ」と言われた。彼には 6 年前からマッサージしてもらっているが、ちょうど 6 年前に一度はダイエットに成功して、いまと同じくらいまで体重が落ちた。そのあと徐々にリバウンドしたのだが、彼に言わせれば、6 年前痩せたときの体よりも今の方がカッコいいとのことだ。この 6 年の間に筋トレも多少はしたので、ただ痩せるだけではなく、筋肉のある体になって来た。あと 5 年で還暦を迎えるおじさんとしては上出来である。

メタボ脱却に成功！と Facebook に書くと、30 人以上の人からいいね！が入った。コメントもいくつか入って、お祝いに食事に行こう！というものもあった。結構、俺と付き合いたいと思ってきている人はいるみたいだ。いまの俺は決して孤独ではないのである。

5. 『万引き家族』(是枝裕和監督・2018)

母は幸せそうだし、かつては不肖の息子だった俺も、今は自慢の息子だと言ってくれている。弟は昔から親思いの孝行息子だ。母は自分の人生に悔いはないみたいだが、ただ、弟も俺も独身で、自分が死んだ後老後が寂しいのではないかとそのことだけが気がかりみたいだ。弟はこれから結婚するチャンスもあるだろう。しかし、俺はない。女性恐怖症が

抜けないし、弟も「お兄ちゃんは家族は持たない方がいいよ」とポツンと言った。「あんたは合わせられないだろうから」。その通りだった。

昔、俺が好きだった映画評論家に南俊子さんという人がいらしたのだが、彼女ふうの言い方をすれば、『万引き家族』は、「世評、喧しい映画」である。カンヌのパルムドールをとったので、映画館は満席。日本の批評家からの評価もほぼ絶賛に染まっている。しかし、是枝監督の映画は、観る前から大体は読めてしまっている。いつだって、テーマは家族である。今回のこの映画に関していえば、アウトローな家族を中心に置いて、伝統的な家族はもう機能しないから、違った形の家族を模索していくという是枝監督の一貫したテーマで、家族を持たない俺にはどうにも抵抗を感じる部分が出てくる。

この映画、家族の中心となるのがリリー・フランキーと安藤サクラの夫婦であり、それに樹木希林のおばあちゃんが絡み、子供が絡む。また安藤サクラの妹で松岡茉優が出てくる。従って、普通の家族の枠組は全然外れていない。カップルと子供、世代の違うおばあちゃんや妹みたいな家族にしなくても、もっと大幅に従来の家族とは外れた疑似家族を作れないものだろうか。

俺は以前、男性グループの頃知り合った男性のところに、週に 1 度、ご飯を食べに行っていた。これは料理教室と銘打って、数人が集まり、一緒に食事を作って、食卓を囲んで無駄話をする。当時のメンバーは、中心となっている社会運動家のおじさん、当時彼の手伝いをしていた女性、彼女の別れた旦那との間の子供 2 人、元公務員で今は定年退職して

趣味に生きている近所のおじさん、ロースクールの学生で当時30くらいだったお兄さん、他にも何人かその時その時で集まることもあった。確かに擬似家族という言い方もできたし、普段外食ばかりで、家族団欒で食事をすることのない俺には楽しい面もあった。

しかし、このグループはそのうち自然消滅となり、しかもそのうちの何人かは今となっては憎しみあっている。そんなわけで、血の繋がりもなく、仕事の繋がりもなく、法律上も繋がっていない人々が共同生活するのは絵に描いたように行くものではない。何の拘束もないから空中分解になってしまう可能性が高いのである。

俺だったら、将来はマンションを1軒買って、そのうちの一部屋を客室にして、友人や過去の教え子などが京都に来た時に泊まってくれるスペースにしたいと思っている。確かに一人の老後は孤独だろうから、こういうひと時の居場所を提供することができれば、それも紛れるのではないか。もちろん、これは夢だが、実現すればいいなあと半ば本気で思っている。

俺は里帰りしていた2日間、家族の愛に包まれながらも、母と弟と3人で過ごすのもしんどかった。家族がいと、素っ裸で部屋の中を歩き回することはできない。俺は超暑がりだが、家族のことを考えればエアコンをガンガン入れることもできない。トイレに行くときも汚さないように気をつけなくてはならない。何事も自分のペースではできなくなるのだ。

『誰も知らない』『そして父になる』『海よりもまだ深く』など、是枝監督の映画は嫌いではないが、是枝監督が提示する家族は、俺

みたいな人向けの家族ではないのである。今度は俺みたいな人を主人公にして映画を作ってくれれば、嬉しいのだけど(笑)。